

研究成果報告書

平成13年度学長特別研究「現代イタリア演劇の研究」

共同研究者氏名：

文化政策学部国際文化学科教授 高田和文（代表）

文化政策学部芸術文化学科教授 扇田昭彦

デザイン学部生産造形学科助教授 佐井国夫

1. 研究の目的

本研究事業の主たる目的は、1997年にノーベル賞を受賞したイタリアの現代劇作家ダリオ・フォーの作品を実際の舞台上演を通して本学学生及び広く一般市民に紹介することにあった。同時に、公開ワークショップとパネル展示により現代イタリア演劇やダリオ・フォーの演劇について研究者自身の理解を深め、さらにその魅力を本学学生及び一般市民に広く理解してもらうこととした。

また、これらの事業の運営や実施に学生を参加させることにより、学生に舞台芸術の製作や舞台公演の現場を体験する機会を提供しようと試みた。

さらに、本事業を「日本におけるイタリア2001年」の催しの一環として行なうことで、イタリア年の文化事業に対する本学の貢献を示すことも目的の1つとした。

2. 実施方法

(1) 舞台公演及び公開ワークショップ

まず、本研究事業の主要な催しとして、本学講堂においてダリオ・フォーの喜劇作品『泥棒もたまには役に立つ』（1幕）を翻訳上演し、併せてイタリアの演劇と演技の方法を紹介するためミラノ在住の演出家井田邦明氏による公開ワークショップを行なった。さらに、舞台上演の後、日伊の演劇と演技の比較、イタリア演劇の現況、ダリオ・フォーの現代演劇における位置などをテーマとしてアフタートークを行なった。アフタートークには、共同研究者である高田、扇田及び井田氏が参加した。ワークショップ、舞台上演、アフタートークとも無料で一般市民に公開された。

舞台公演及び公開ワークショップの実施概要

日時：2001年9月29日（土）14：00～16：30

場所：静岡文化芸術大学講堂

第1部 イタリア演劇公開ワークショップ（井田邦明）

第2部 『泥棒もたまには役に立つ』上演（ダリオ・フォー作、高田和文訳、井田邦明演出、シアターX製作。出演者：鈴木健介、香月弥生、大西加代子、武藤翠、博田章敬、近藤広務）

第3部 アフタートーク（扇田昭彦、井田邦明、扇田昭彦）

『泥棒もたまには役に立つ』（1958年）あらすじ
フランスの笑劇風的一幕もの。第二次大戦後、カトリックの総本山バチカンのあるイタリアでは、カトリックのモラルが色濃く残り、離婚は認められず、浮気が発覚すると実刑が課せられていた。そのため、好景気に乗るピッコロ・ブルジョワジー（中流

市民階級)たちは、いかに表沙汰にならぬよううまく浮気するかに腐心していた。この作品の主人公であるアンチヒーロー、プロレタリア階級の泥棒は、忍びこんだピッコロ・ブルジョワジーの家で、彼ら夫婦たちの浮気のために一肌脱がされ、役に立つという仕儀になる。

作者及び演出家プロフィール

○ダリオ・フォー

1997年ノーベル文学賞を受賞。自ら喜劇俳優として舞台に立つ一方、劇作、演出、衣装、美術などジャンルを超えて多彩な創造活動を展開。伝統的な喜劇の文法を踏まえながら現代的なテーマを取り上げた作品は、大衆の絶大な人気を集めるとともに、批評家の論議を巻き起こした。新作の舞台は今なおいつも満員となる。

○井田邦明

安部公房スタジオに所属。1973年に渡仏、ルコック演劇学校に入学。卒業後、ミラノで劇場と劇団を主宰し、90年まで芸術監督を務める。現在は、ミラノ市立パオロ・グラッシ演劇学校で教えるほか、自ら演劇学校を設立し、校長を務める。これまでグロトフスキやバルバなどと一緒に演劇活動を行う。三島由紀夫や安部公房の作品をイタリアに紹介する一方、狂言やコンメンディア・デッラルテのスタイルを超えた「人間喜劇」の創造をめざす。

(2) ダリオ・フォー舞台写真・舞台美術展

さらに、舞台上演の日から1週間にわたって本学西館ギャラリーにおいて、ダリオ・フォー作品の過去の舞台の舞台写真、舞台美術及び衣裳スケッチ、公演ポスターのパネル展示を行なった。入場は無料。なお、パネル作成用の写真はイタリアのCTFR(ダリオ・フォーとフランカ・ラーメ劇団)よりCD-ROMの形で提供されたものである。

日時：2001年9月29日(土)～10月6日(金)

場所：静岡文化芸術大学 西館ギャラリー

展示内容：

- ・ダリオ・フォーの紹介及び年譜(添付資料参照)
- ・舞台写真、舞台美術スケッチ、衣裳スケッチ、公演ポスターなど(以下の作品について計30点)

『泥棒もたまには役に立つ』『消える死体と服を脱ぐ女』(1958年初演)、『裸の男と燕尾服の男』(1958年初演)、『天使たちはピンボールをしない』(1959年初演)、『ミステーロ・ブッフオ』(1969年初演)、『アナーキストの事故死』(1970年初演)、『払えない、払わない!』(1974年初演)、『ママのマリファナは最高』(1976年初演)、『クラクションを吹き鳴らせ』(1981年初演)、『開かれたカップル』(1983年初演)、『ハーレクイン、ハーレクイン』(1985年初演)、『ジョアン・パダンのアメリカ発見』(1991年初演)、『セビリアの理髪師』(1992年初演)

以上の事業のうち、舞台作品上演と公開ワークショップのための準備作業はおもに

高田が東京・両国のシアターX（カイ）の協力を得て行なった。また、事業の広報及び地元演劇関係者への告知などは、高田と扇田が協力して行なった。さらに、扇田と高田はアフタートークのための日伊の演技・演劇の比較分析などの作業も行なった。また、パネル展示については主として佐井が担当し、イタリアのCTFRより提供されたCD-ROM素材をもとに、本学学生の協力を得て展示用パネルの製作を行なった。

なお、本研究事業は全国レベルで行なわれた「日本におけるイタリア2001年」いわゆる「イタリア年」の催しの一環として実施され、「日本におけるイタリア2001年財団」及びイタリア文化会館の後援を受けた。

また、事業の実施にあたっては、東京両国のシアターX（カイ）、CTFR、日本演出者協会の協力を得た。

3. 得られた成果

舞台上演の当日は、本学学生のみならず地域の多くの市民が参加し、公開ワークショップ・上演ともたいへん好評であり、盛況のうちに終えることができた。イタリアの伝統的な仮面を使ってイタリアの演技の身体表現を具体的に示した井田邦明氏のワークショップは、とりわけ地元の演劇関係者の大きな関心を集めた。また、シアターX製作による『泥棒もたまには役に立つ』の上演は、これまでイタリア演劇をほとんど知らなかった一般市民にも非常にわかりやすく、楽しんでもらうことができた。アフタートークも短時間ではあったが、イタリアの演劇やダリオ・フォーの演劇について理解を深める良い機会となった。また、本件事業については中日新聞、静岡新聞といった地元の新聞も大きく取り上げたので、来場した参加者のみならず広く地域の市民に本学の活動について周知させることになった。

さらに、今回の上演作品はほぼ同じ時期に東京・両国のシアターX（カイ）でも上演され、その際には本学で展示されたパネルを輸送して展示を行なった。こうした東京の演劇関係者との交流もまた本学の存在を知らしめる機会となった。しかも、「イタリア年」の催しの一環として行なったことで、イタリア関係者や関係機関に対しても本学の存在や活動をアピールすることができた。

添付資料

- 1) 舞台写真・舞台美術展の説明パネル原稿
- 2) 公演ちらし
- 3) 関連新聞記事
- 4) ワークショップ及び舞台上演ビデオ（1部のみ）
- 5) パネル展写真（1部のみ）

イタリアが生んだ万能の演劇人～ダリオ・フォー

1997年に演劇人としては史上初のノーベル文学賞を受賞したダリオ・フォーは、「イタリアが生んだ万能の演劇人」とも称され、劇作家・俳優・演出家を一人で兼ねるだけでなく、舞台美術・衣裳・音楽・振り付け、と演劇に関わるあらゆる仕事をこなす。

彼の作品はイタリア伝統のコンメディア・デッラルテの喜劇的精神を最大限に生かしつつ、麻薬・宗教・政治・性差別といった現代的なテーマを巧みに織り込み、「強い政治性を持ちながら、一級のエンターテインメントでもある」という稀有な性格を持っている。

現在も年1本のペースで新作を発表しているが、客席はいつも超満員で、終始爆笑の渦に包まれる。これほど大衆的な、しかも絶大な人気を誇るノーベル賞作家はかつていなかったらう。

ダリオ・フォーの演劇活動の軌跡

1926年、北イタリアのヴァレーゼ生れ。ミラノのブレラ美術学院で美術・建築を学ぶ。

1950年代からラジオ番組の脚本を手掛け、やがて軽演劇の舞台で活躍。

1954年、後に夫人となる女優フランカ・ラーメとともに劇団を結成、劇作家・俳優・演出家として活動開始。

1959年、本格的喜劇『天使たちはピンボールをしない』を上演。以後、『白と黒の二丁拳銃』（1960）、『盗みはほどほどに』（1964）、『奥様を捨てろ』（1967）などのヒット作を書く。

1968年、商業劇場での上演を放棄し、イタリア共産党（当時）傘下の文化団体で活動を行なう。

1969年、一人芝居のパフォーマンス劇『ミステーロ・ブッフォ』を上演。中世の聖史劇を独自の解釈でパロディー化したもので、左翼系の若者たちに圧倒的人気を博す。

1970年、共産党を離れて独自の上演組織を作り、実際の政治事件やスキャンダルを題材に『アナーキストの事故死』（1970）、『チリ人民戦争』（1973）などの政治風刺劇を発表。その過激な内容に当局が神経を尖らせ、フォー自身が公演中に逮捕される。また、夫人のフランカ・ラーメも極右グループより暴行を受ける。

1974年、『払えない、払わない！』を発表。インフレに苦しむ庶民の抵抗を描いた喜劇で、このころからフォーは再び伝統的な喜劇の手法に回帰する。その後、『誘拐されたファンファーニ』（1975）、『ママのマリファナは最高』（1976）、『クラクションを吹き鳴らせ』（1981）などのヒット作を生む。

1983年、夫婦関係の危機と性差別を描いた一幕喜劇『開かれたカップル』を上演。

1988年、ロッシーニ作曲のオペラ『セビリアの理髪師』を演出。このころからフォーの

演出の才能が注目を集める。

1989年、ローマ法王庁の麻薬・避妊政策を風刺した『法王と魔女』を発表。

1990年、パリのコメディ・フランセーズでモリエールの喜劇『いやいやながら医者にされ』と『空飛ぶ医者』を演出、高い評価を得る。

1991年、コロンブスのアメリカ大陸到達500周年にちなむ一人芝居『ジョアン・パダンのアメリカ発見』を上演。

1997年、ノーベル文学賞受賞。イタリア人としては6人目、イタリアの劇作家としてはピランデッロ（1934年受賞）に次いで2人目の受賞。

ダリオ・フォーのびっくり箱

現代イタリア演劇の研究

公開ワークショップ&舞台上演

2001年9月29日(土) 開場13:30 開演14:00

場所：静岡文化芸術大学講堂

入場無料(当日直接会場にお越しください)

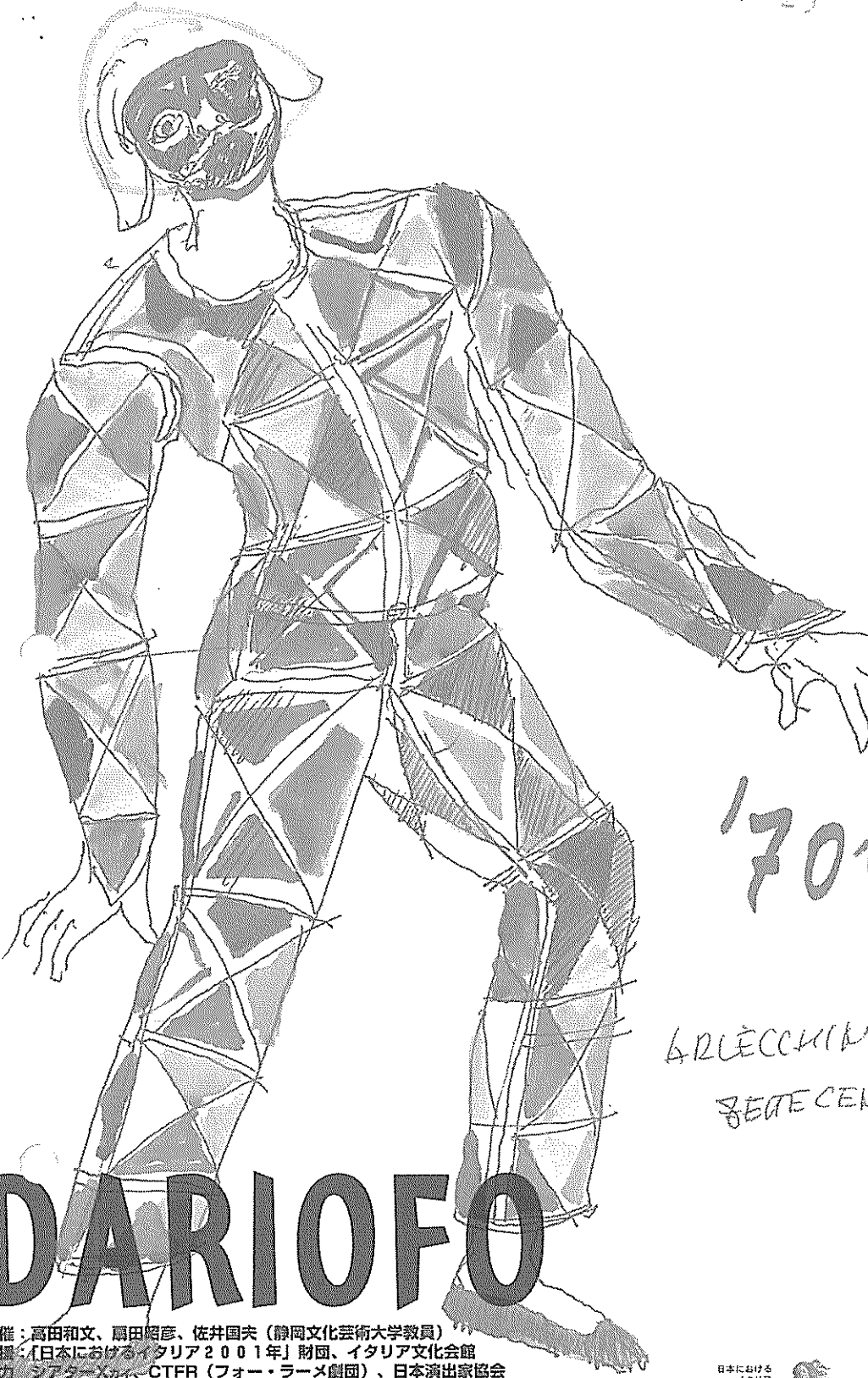
ダリオ・フォー舞台写真&舞台美術展

2001年9月29日(土) 10月5日(金)

場所：静岡文化芸術大学 西館ギャラリー(入場無料)

- 第1部 イタリア演劇公開ワークショップ(井田邦明)
第2部 「泥棒もたまには役に立つ」上演
ダリオ・フォー作、高田和文訳、井田邦明演出、シアターメカ製作
第3部 アフタートーク(扇田昭彦、井田邦明、高田和文)

展示内容：
ダリオ・フォーの舞台写真、舞台美術・衣装スケッチ、公演ホスターなど
展示パネル製作：佐井国夫



DARIO FO

主催：高田和文、扇田昭彦、佐井国夫(静岡文化芸術大学教員)
後援：「日本におけるイタリア2001年」財団、イタリア文化会館
協力：シアターメカ、CTFR(フォー・ラーメ劇団)、日本演出家協会
なお、この事業は静岡文化芸術大学学長特別研究費により行われるものです。
お問い合わせ：静岡文化芸術大学高田研究室
TEL/FAX 053-457-6152 E-mail ktakada@suac.ac.jp



ダリオ・フォー
Dario Fo

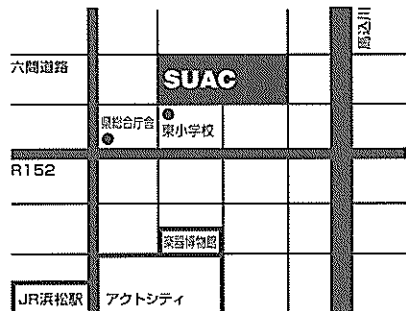
1997年ノーベル文学賞を受賞。自ら喜劇俳優として舞台に立つ一方、劇作、演出、衣装、美術などジャンルを超えて多彩な創造活動を展開。伝統的な喜劇の文法を踏まえながら現代的なテーマを取り上げた作品は、大衆の絶大な人気を集めるとともに、批評家の論議を巻き起こした。新作の舞台は今なおいつも満員となる。



井田邦明
Kuniaki Ida

安部公房スタジオに所属。1973年に渡仏、ルコック演劇学校に入学。卒業後、ミラノで劇場と劇団を主宰し、90年まで芸術監督を務める。現在は、ミラノ市立パオロ・クラッチ演劇学校で教えるほか、自ら演劇学校を設立し、校長を務める。これまでクロトフスキやバルバなど共同して演劇活動を行う。三島由紀夫や安部公房の作品をイタリアで紹介する一方、狂言やコンメディア・デッラルテのスタイルを超えた「人間喜劇」の創造を目指す。

このたび、静岡文化芸術大学教員3名(文化政策学部教授高田和文、同教授扇田昭彦、デザイン学部助教授佐井国夫)は、学内研究事業の1つとして、現代イタリアを代表する劇作家ダリオ・フォーの作品上演と舞台写真・舞台美術のパネル展示を行うことになりました。併せて、ミラノ在住の演出家井田邦明氏を招き、イタリア演劇とその身体表現に関する公開ワークショップを行います。この催しは「日本におけるイタリア2001年」の文化事業の1つでもあり、演劇愛好者のみならず幅広い層の方々のご参加をお待ちしています。



公共交通機関を御利用ください。
お車の場合は市営駐車場を御利用ください。

ダリオ・フォーの世界再現

イタリアのノーベル賞劇作家

イタリアのノーベル賞劇作家ダリオ・フォー氏の世界を再現する「ダリオ・フォーのびっくり箱」現代イタリア演劇の研究」が二十九日、浜松市野口町の静岡文化芸術大学で開かれる。フォー作品の上演や、公開ワークショップなどを通じ、その魅力を紹介する。

松 29日、静岡文化芸術大学

浜 9.19 多彩な才能紹介

イタリア演劇研究の高田和文教授、演劇評論家として知られる扇田昭彦教授、グラフィックデザイナーの佐井国夫教授による共同研究事業。ミラノ在住の演出家井田邦明氏



舞台上立つダリオ・フォー氏(中央)

を招いた身体表現の公開ワークショップ、初期の代表作「泥棒もたまには役に立つ」の上演、アフタートークを行う。作品は、高田教授の翻訳による日本語上演。浜

松に先立ち、七月から東京で行われた井田氏のワークショップの参加者の中から、オーディションで選ばれた役者が舞台上立つ。また、フォー氏の主宰する「フォー・ラーメ劇団」の協力を得て、舞台写真や舞台美術、衣装のスケッチなどを展示するパネル展も企画。フォー氏の多彩な才能を紹介する。



井田 邦明氏

高田教授は「風刺精神に富み、身体表現の面白

ダリオ・フォー一九九七年にノーベル文学賞を受賞した現代イタリアを代表する劇作家。喜劇俳優として自ら舞台上立つ一方、劇作や演出、舞台美術などに多彩な才能を発揮する。イタリアの伝統的な喜劇の手法を踏まえて現代的なテーマに取り組み、絶大な支持を集める。

さて笑わせる、魅力あふれる作家。知らない人にもせひ見に来てほしい」と話す。フォー氏本人からも、「作品は、パロディと喜劇の精神により、矛盾と偽りと不条理に満ちた私たちの現実を映し出したもの。心ゆくまで笑ってほしい」とのメッセージが寄せられている。

入場無料。同大講堂で、午後二時開演。鑑賞希望者は当日直接会場へ。

ダリオ・フォー氏紹介

「イタリア演劇の研究」を開催

静岡文化
芸術大学

9/30

静岡

観客を笑いの渦に巻き込んだ「泥棒もたまには役に立つ」―浜松市野口町の静岡文化芸術大



イタリアのノーベル賞劇作家ダリオ・フォー氏の世界を紹介する「ダリオ・フォーのびっくり箱―現代イタリア演劇の研究」が二十九日、浜松市野口町の静岡文化芸術大学で開かれた。ワークショップや作品上演などを通じ、風刺精神に富んだ

フォー氏の作品世界を築きました。作品への導入としてまず、イタリア演劇に造り手の深いミラノ在住の演出家井田邦明さんが、身体表現のワークショップを開催。イタリアの伝統的な仮面即興劇「コンメディア・デッラルテ」を中心

にイタリア演劇の特色を説明し、演技も交えてその魅力と可能性を示した。続いて井田さんの演出、静岡文化芸術大学の高田和文教授の翻訳で、初期の代表作「泥棒もたまには役に立つ」を上演。皮肉たっぷりに展開される不倫カップルと泥棒夫婦らのドタバタに、手を

たたいて笑い転げる観客。装のスケッチなどを展示するパネル展も始まり、またこの日は、学内のギャラリーでフォー氏の舞台写真や舞台美術、衣

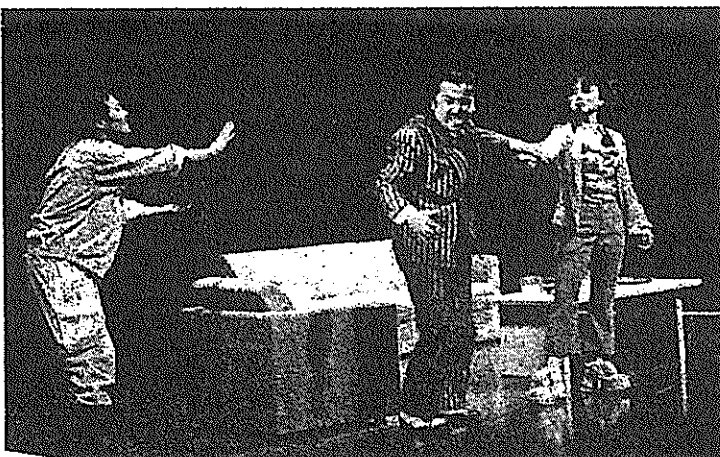
心の動き巧みに表現

9/30
中日

イタリアのノーベル賞劇作家ダリオ・フォー氏の世界を、舞台上演などを通じて再現、紹介する「ダリオ・フォーのびっくり箱―現代イタリア演劇の研究」(中日新聞東海本社後援)が二十九日、浜松市の静岡文化芸術大で開かれ、学生や演劇ファンが多数詰め掛けた。同大の高田和文教授、

高田昭彦教授、佐井国夫助教授による学内研究事業で、一般にも無料公開した。イタリア・ミラノで活躍する演出家、井田邦明氏を講師に招き、マスクなどをを用いた身体表現のワークショップや、フォー氏の代表作「泥棒もたまには役に立つ」の上演、意見交換会を行った。今回、高田教授の翻訳

ノーベル賞 劇作家の世界紹介



日本語上演されたフォー氏の代表作のひとコマ―浜松市の静岡文化芸術大で

研究事業を公開

静岡文化
芸術大

同大の西館ギャラリーでは、十月五日までフォー氏にちなんだ舞台写真・舞台美術の展示もしている。入場無料。

イタリアを代表する劇作家でノーベル文学賞受賞者タリオ・フォー氏の作品を紹介する「タリオ・フォーのびっくり箱」現代イタリア演劇の研究(中日新聞東海本社後援)が二十九日午後二時から、浜松市野口町の静岡文化芸術大学で開かれる。入場無料。

同大の高田和文(イタリア演劇研究者)、扇田

ノーベル賞作家の フォー氏作品紹介

あす、静岡文化芸大で

昭彦(演劇評論家)、佐井国夫(グラフィックデザイナー)ら三教授による学内研究事業として行われる。

フォー氏は作品にイタリア伝統の喜劇的精神を生かしながら、麻薬や宗教、政治といったテーマを織り込み現代社会を風刺している。

「泥棒もたまには役に立つ」の日本語上演。三部は扇田教授らによるアフタートーク。入場希望者は直接会場へ。

同日から十月五日まで、フォー氏の舞台写真&舞台美術展も開かれる。

問い合わせは同大高田研究室 電話053(457)6152。

三部構成。一部は公開ワークショップ。二部は